

マクタガートの「時間における矛盾」を書き換える（要旨）

入不二基義（山口大学）

マクタガートの「時間の非実在性」の証明は、失敗している。しかし、私が主張したいのは、「（マクタガートの証明に反して）A系列は矛盾しない」ということでも、「（マクタガートの証明に反して）B系列の時間が実在する」ということでもない。むしろ、マクタガートの「失敗」自体のうちにこそ、「時間における矛盾」というアイデアによって言うべきだったことが、まだ埋もれて残っていると思う。そこで、マクタガートのいくつかの「失敗」を検討することを通して、マクタガートとは違う形で、「時間における矛盾」を掘り起こしてみたい。「論点」は、次の4つである。

論点1 A系列とB系列は、別個の系列か？

論点2 時間系列外のXは、どのように働くか？

論点3 時間特有の変化は、どのように特殊か？

論点4 「矛盾」は、どこに見いだされるべきか？

I 論点1について

マクタガートは、A系列とB系列を切り分ける基準を二つ挙げている。（1）B特性は複数の出来事や時点のあいだの関係であるのに対して、A特性は一つの出来事や時点について言われる。（2）B特性は永続的・恒久的であるのに対して、A特性は時間特有の変化の要である。しかし、どちらの基準も、うまく機能しないと思われる。

（2）では、「永続・恒久」と「変化」という対比は、無時間と時間との対比になってしまうか、「永続・恒久」も「時間特有の変化」を被るものになってしまうか、そのどちらかになってしまう。ゆえに、「永続・恒久」と「変化」という対比は、＜時間の＞系列を二つの別個の系列へと切り分ける基準としては、機能しない。

（1）では、複数の出来事と一つの出来事という対比は、見かけ上のものにすぎない。「一つの出来事」といっても、それは「任意の或る一つの出来事」であり、「任意の或る一つ」は複数性を前提にするからである。それゆえ、任意の或る一つの出来事についてA特性を言うことは、任意の他の一つの出来事との「前後関係」を含まざるをえない。出来事の単数と複数という対比は、A系列とB系列を別個の系列として切り分ける基準としては、機能しない。結局、A / Bという区別は、せいぜい、同一の系列についての様相的な区別にとどまる。

以下、論点2においては、「一つの出来事」を「任意の或る一つの出来事」とは見なさない方向を探り、論点3では、時間特有の変化の特殊性を、「永続性・恒久性」との対比において考えるのではない方向を探る。

II 論点2について

「現在」というあり方には、「まさに現在であること（絶対的な現在）」と「未来からは過去として捉えられる現在（相対的な現在）」とが重ねられている。「或る任意の一つの出来事」ではないような「一

つの出来事」を考えることは、「まさに現在である出来事」を考えることに他ならない。

マクタガートが言う「時間系列外のX」は、「現在の出来事」に対して、特権的なあり方と相対的な位置づけの両方を付与するように働く。しかも、「現在」は、ただ単に二重（絶対的かつ相対的）のではなく、基準（原点）の設定（特権的なあり方）とそれによって計られるもの（相対的な位置づけ）とが、短絡あるいは癒着しているような仕方で、二重なのである。

A / Bの区別の目安の一つとされていた「出来事の一つ性」と「出来事間の関係性」という対比は、むしろA規定自体の中に組み込まれている、「特権的な現在」と「相対的な現在」の短絡あるいは癒着的な二重性として、先鋭化する。

III 論点3について

時間特有の変化（現在のことが過去のことになる）とは、ものについての状態変化とは鋭く区別される変化であり、「同一不変の一つの出来事」について生じる唯一の変化であると、マクタガートは考えている。しかし、マクタガートの「時間特有の変化」のこの取り出し方は、失敗していると思う。

第一に、時間特有の変化の特殊性を、ものと出来事という、変化が言われる対象の区別に重ねてしまうのは、ミスリーディングである。むしろ時間特有の変化の特殊性は、その「高階性」にこそ見て取るべきである。

第二に、時間特有の変化は、「同一不変の一つの出来事」についてそれを言おうとしても、失敗するだろう。「一つの出来事」というのが、論点1で述べたような「任意の或る一つの出来事」であるとすると、時間変化は、系列上の複数項を順々に移動することとして表象されることになる。それでは、なんら「時間に特有の」変化ではなくなってしまう。他方、「特定の一つの出来事」について、それが決定的に過ぎ去って無くなるような「特有の変化」を考えようとするならば、その「一つの出来事」は、（そもそも無くなってしまふのだから）時間変化を通じて同一不変であるものとしては、機能しないことになる。

時間特有の変化は、その他の種類の変化とは違って、同一不変の主語的な何か<について>言われるような変化ではない。このことを、マクタガートの失敗から読み取るべきである。時間特有の変化とは、「特定の一つの出来事」が保持されてたうえでの何らかの変化ではなくて、「まさに現在の出来事すべて」が、一挙に消え去って無くなるような変化である。ゆえに、時間特有の変化とは、変化を貫いて同一不変の「もの・こと」と「それについての何らかの違い」という図式が、そもそも破綻するような変化なのである。

IV 論点4について

マクタガートの「時間における矛盾」とは、「出来事について、過去・現在・未来は、両立不可能かつ両立可能である」という矛盾である。

しかしまず、「両立不可能」「両立可能」については、静性に基づく読み・動性に基づく読みの組み合わせにおいて、何通りかの解釈が可能である。このことから読み取るべきことは、過去・現在・未来の「両立不可能」かつ「両立可能」という「矛盾」とは、「時間特有の変化における動性」と「記述的な固

定における静性」とのあいだの折り合いのつかなさに他ならないということである。これが、マクタガートの「時間における矛盾」に対する、第一の「書き換え」である。

第二の「書き換え」は、もうすでに論点2の箇所で行っている。「現在」とは、唯一のアクチュアリティとして絶対的な基準（原点）であり、かつその基準（原点）によって設定される「過去 - 現在 - 未来」の中の相対的な一項であり、かつその相対的な一項の「名」によってしか絶対的な基準（原点）は指示されない。この「絶対的な現在と相対的な現在との短絡・癒着」こそが、マクタガートの「時間における矛盾」に対する、第二の「書き換え」である。

第一の「書き換え」（時間的变化と記述的固定）と第二の「書き換え」（絶対性と相対性の短絡・癒着）によって、むしろ隠されてしまう最深部の「矛盾」がある。それは、時間的变化と「現在」の絶対性との相容れなさである。これが、マクタガートの「時間における矛盾」に対する、第三の「書き換え」である。

このような「書き換え」に基づくならば、「時間は矛盾を含むゆえに実在しない」のではなく、「時間は、決定的に相容れない二つのリアリティによって構成されている」と言うべきである。